（2）ゾーンごとの特性

■豊かな植生

福井県は日本海に面し、本州のほぼ中央部に位置している。この地理的位置と寒・暖流の影響、海岸から高山帯にまで変化する複雑な地形などから、県内には北方系植物と南方系植物とが分布し、移行帯ではそれらが混在している。また日本海側にしか見られない植物の生育も見られ、変化に富んだ豊かな植生になっている。

代表的な自然植生として、沿岸丘陵山地脚部から標高400ｍぐらいにかけて、タブノキやスダジイなどの照葉樹林が、標高約800～1,400ｍぐらいにかけてブナの落葉広葉樹林が見られる。また、標高400～800ｍぐらいまでは、自然度の高い二次林である、ブナ林への移行帯としてのクリやミズナラなどの落葉広葉樹林が標高に応じて分布している。

■県土保全の役割を果たす奥山の緑（自然林、二次林、施業林）

標高400ｍ以上の山地には、アカマツやクリ、ミズナラなどからなる二次林やブナなどの自然林、スギ、ヒノキ等の施業林などがモザイク模様を構成している。これらの森林の緑は木材等生産機能の他、水源かん養、山地災害防止、生活環境保全、保健文化など多様な機能を持ち、総合的な県土保全の役割を果たしている。

■身近な生活環境としての田園・里山の緑

集落や市街地の周りに見られる田園地帯は、食料生産の場として県民の生活を支えるとともに、身近で開放的な自然空間として親しまれている。また集落や市街地から最も近い丘陵・低山帯（おおよそ5～10㎞圏で標高約400ｍぐらいまで）に見られるアカマツやコナラなどの二次林は、薪炭林や農用林などとしてごく最近まで日常的に県民と深く関わってきた。田園や里山と呼ばれるこれらの緑は、絶えず人為の影響を受けることによって存続し、多様な生物相をもつ固有の自然を培ってきた。しかし近年では、生産技術や生活様式の変化から、人間と共存してきたこの固有の自然が失われようとしている。身の回りから自然が失われつつある現在、人間と共生できる身近な自然として保全されなければならない緑である。

■都市の環境を保全する市街地内の緑

市街地内には、足羽山や村国山など大小の島状の緑や周辺の丘陵地から張り出した尾根などが見られる。これらの緑は多様な機能によって良好な都市環境を形成するとともに、周辺の田園・里山の緑と生態的なネットワークを形成する役割をもっている。また、市街地内の公園緑地や街路樹等は、生態的なネットワークを補完するとともに、都市の生活環境に潤いと安らぎを与え、環境保全、レクリエーション、防災、景観等多様な機能をもっている。

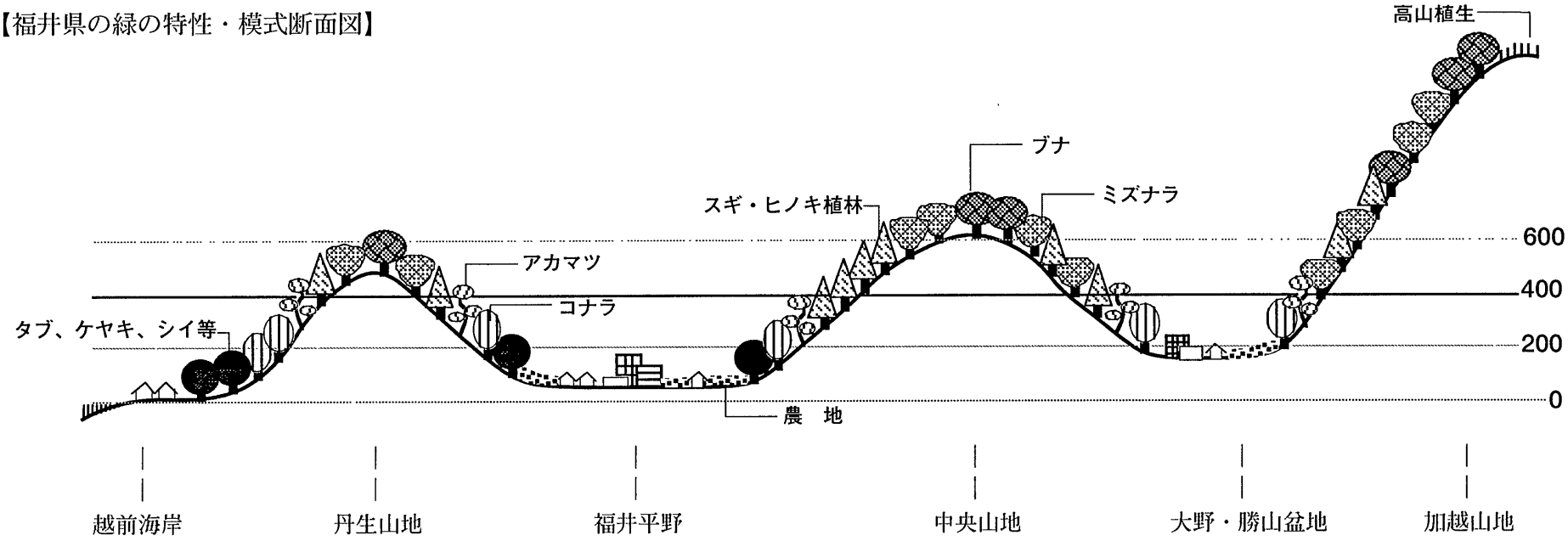
■地域文化や歴史資産と一体となった緑

本県には多数の歴史文化資産や文化財があり、そのうち社寺や古墳、庭園、史跡、名勝、伝統技術（和紙、陶芸等）、伝統芸能等は、各地域で歴史的に形成されてきた多様な緑と密接な関連をもっている。特に古くから開けた市街地や旧集落をかかえる都市・田園地域や里山地域には、多くの特徴的な緑が分布しており、全県的な視点における緑の役割とともに、地域個性としての緑の果たす役割は大きい。

■県土の多様な緑を貫く河川

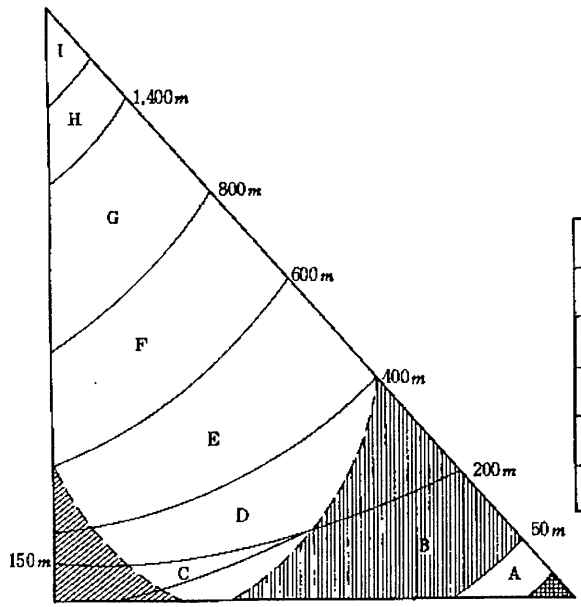
九頭竜川をはじめとする本県の主要河川は、以上のような多様な県土の緑を山地から海岸まで貫いて流れ、それぞれの自然を結ぶ生態的な移動経路であるとともに、流域の県民生活や地域文化を結ぶ交流ネットワークの機能をもっている。また近年は、治水、利水面とともにレクリエーションの場としての需要も高まっており、その自然環境の保全と活用のありかたが注目されている。

【福井県の緑の特性・模式断面図】



【福井県における植生帯】

（自然環境保全基礎調査・植生調査報告書より 1988）



A	イノデータブノキ群集	G	オオバクロモジーブナ群集
B	ヤブコウジースダジイ群集	H	ダケカンバ林
C	モミーウラジロガシ群集	I	オオシラビソ林
D	クリーコナラ林		クロマツ林
E	クリーミズナラ林		アカマツ林
F	ブナーミズナラ林		スギ林